

「デジタルポートフォリオ」の可能性

教職大学院では、10月から始まる「後期」において、まさに教職大学院ならではの「教育実践プロジェクト」あるいは「長期インターンシップ」が本格的に始まります。「学校において同僚性をいかに築いていくか」、「数学の授業においていかに協働的な学びを実践するか」、「基礎・基本の学びにおいてつまずいている子ども達を、一人一人、いかに支援していくか」等々、一人一人の院生が自らの研究テーマをもって学校現場に入っていきます。

ところで、この「教育実践プロジェクト(長期インターンシップ)」において、重要な役割を果たしているのが、やはり教職大学院ならではの「デジタルポートフォリオ」と呼ばれている実践システムです。

「デジタルポートフォリオ」とは、それぞれの院生が学校現場に入っていく、自らの目を見た授業中の子ども・生徒の「学び」のあり様、あるいは授業に関わらず、先生方と交わした会話等々を書き起こし、教職大学院専用のネット上にアップするものです。そして自らがアップした記録には、他の教職大学院生あるいは専任教員からコメントが寄せられる仕組み(システム)になっています。今回は、このデジタルポートフォリオについて、教職大学院の一教員である私が感じている「可能性」、もっと言えばその素晴らしさについて語ってみたいと思います。

◆「書くこと(綴ること)」による「自分くずし」と「自分づくり」

院生のみなさんのデジタルポートフォリオを読んでいて、まず強く感じるのが、この『書くこと(綴ること)』による『自分くずし』と『自分づくり』ということです。一人の「院生」として、改めて学校現場に入り、改めてじっくりと子ども・生徒の「学び」のあり様を見つめ、そこで感じたことを言葉化し、綴ること。この「書く(綴る)」という作業において、例えば一人の院生は、長年、実は自分が「教師の思い通りに動いてくれる『よい子』」を求めていたのだという自らの「教育観」に気づきます。このように、自分自身を振り返り、そのことで、一人一人の院生は、それまでの「自分をくずし」、新しい「自分をつくっている」、と見えるのだと思います。

私自身は、大学の研究者として長年、「ことば」の問題に取り組んできましたが、「ことば」の持つもっとも重要な働きとは、人が「ことば」を語る(あるいは綴る)ことによって自分自身を創造していく(創造しなおしていく)ことだと感じています。

一度、現場を離れ、そして(よい意味で距離をもって)現場に再び入っていく、その中で言葉を綴る(書く)。ここに、デジタルポートフォリオの一つの大きな意味があるのだと思います。

◆他者への優しさ、そして誠実さ

もう一つ、デジタルポートフォリオから見えてくる大きな意味について語っておきたいと思います。それは、現場に入っていく院生一人一人が、現場で出会う子ども・生徒あるいは先生方に本当によく「寄り添っている」ということです。現場に入って「書く(綴る)」ことは、子ども・生徒あるいは現場の先生方と、ほどよい距離を生みだします。そして、子ども・生徒あるいは現場の先生方と、このほどよい距離をもつことによって、院生のみなさんは、例えば、現場の先生方の「苦しさ」に「寄り添う」ことが出来ているのだと思います。また例えば、ある院生

は、子ども・生徒の授業における「つまずき・間違い」を、いわゆる「つまずき・間違い」としてではなく、子ども・生徒の「その時」の「思考」とはどのようなものだったのかを「書く(綴る)」ことを通して追究しています。このような姿勢こそ、真に「子どもに寄り添っている」と言えるのではないのでしょうか。



最後に、アップされたポートフォリオに対して、院生が相互にコメントし合っていることについて触れておきたいと思います。一言で言えば、相互の間で交わされているそのコメントは、優しく、そして誠実です。例えば、修士2年目の院生は、修士1年目の院生に対して、次のように温かく語りかけています。

「私も実践校で取り組みながら、思うようにはできない自分を受け入れつつ、さらなる改善策を生み出すことの方が学びが多いのだと感じています。もしかしたら、そうした姿を見せる方が先生方との距離も縮まるような気さえします。Uさんが心掛けたいことをうなずきながら読んでしまう自分がいました。お互い頑張ってください。」

このように、院生のみなさん一人一人の内に、他者への優しさ、そして誠実さが育まれているという事実の中にも、デジタルポートフォリオのもつ可能性と素晴らしさを感じています。(文責:青柳宏)

「主体的・対話的で深い学び」

教育実践高度化専攻教授 松本 敏

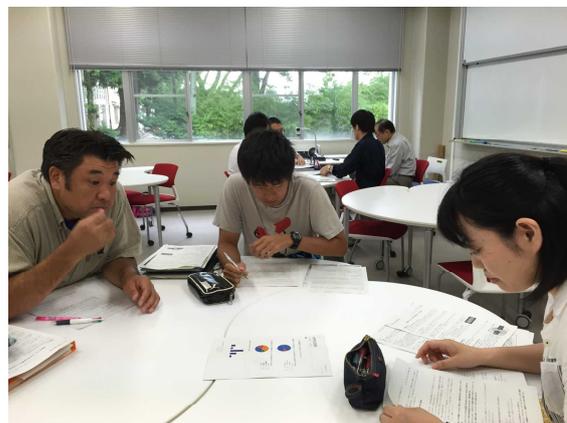
現在次の学習指導要領の作成に向けて議論が進められていますが、その中でも気になる言葉の一つがこれです。平成26年11月20日の中教審への諮問では「主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」という表現でしたが、昨年の「論点整理」あたりから「主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点）」という表現に変わっています。中教審教育課程部会での説明では「対話的」というのは、「子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに」とあり、「協働」を否定しているわけではありませんが、目の前にいる人以外との関係も含む広い言葉に言い換えられています。また「深い学び」は「習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる」ような学びと説明されています。このような変更があった理由は、アクティブ・ラーニングを自称する実践の中に、外見だけ活発に見えて実は頭が働いていないグループ活動などが見られ、それが批判されているからでしょう。

諮問では、これまでの教科中心・教育内容中心の学習指導要領から、教科を超えた資質・能力や学習観の変更を含む大改革を期待したと思われるのですが、実際の作成作業では、批判される側に回った教科等の人たちが中心ですから、彼らは教科を超えた能力論や教育方法論を、教科教育の蓄積を軽視する浅い上滑りな議論と考えます。その結果、資質・能力も学習観も教科の枠内に引き戻されがちです。そのようなせめぎ合いの中で改訂が進んでいる様子が、わずかな言葉の変更にも垣間見られると思います。

《シリーズ:教職大学院授業紹介⑭ 「個に応じた指導の実際と評価」(共通科目[前期])》

通常学級の授業をデザインするとき、「集団での学び」と「個の理解」は重要な要素であり、互いに高め合う関係を築くことが大切です。特に、近年は「個に応じた指導」が通常学級における特別支援教育の立場からも強調されてきました。本授業では、個や集団を評価し、その成果を学習環境のデザインに生かすことを目的としています。

本授業の特徴の一つは、実際の学校現場に出向き、受講者全員で同じ授業を参観することです。参観後は、学校をお借りしその場で見取りの交流をします。集団の中における個の理解の方法や個への対応を生かした集団指導の在り方や、多様な視点で授業をデザインすることの大切さを痛感しました。



その他にも、「集団の学びと個の理解」「個に応じた支援の形態」「学習のユニバーサルデザイン」「発達障害児のアセスメント」「オーセンティック評価(ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価)」「統計による量的評価」など、多彩な内容を学びます。

多彩な内容を統合することを目的として、ジグソー学習を取り入れています。本授業は、前半は授業参観などの演習を含む講義を行います。講義の最後に学修内容を発展させるための追究課題が与えられます。それらを、小グループ(エキスパート班)で追究します。その成果は、異なったテーマが集まるグループ(ジグソー班)にて交流をします。これらの活動を通して、「個に応じた指導の実際と評価」を理解すると共に、協働的な学習の在り方も学んでいます。

(担代表表: 久保田善彦)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。